

高等学校における部活動での体罰経験に関する比較研究

A Comparative Study on the Experience of Corporal Punishment in Club Activity of Senior High School

キーワード：体罰、部活動、権利意識

Key Words: Corporal Punishment, Club Activity, Awareness of Rights

笹生 心太

大石 千歳

SASAO Shinta

OISHI Chitose

問題意識

近年、部活動指導の場面における体罰への注目が強まっている。特に、2012年12月に起こった大阪市立高校バスケットボール部での体罰事件をきっかけとして、体罰に対する社会的視線は厳しくなった。しかし、依然としてスポーツ指導者による体罰は後を絶たず、指導者の意識をどう変えていくかは、スポーツ現場の重要な課題の1つとなっている。

本学は、将来のスポーツ指導者を輩出するという社会的使命を有しており、学生に対して体罰や暴力に関する正しい認識を与えることはきわめて重要である。そのための基礎作業として、本学の学生が体罰に対してどのような意識を有しているかを把握することが必要となる。

昨年度の共同研究においては、本学の学生に対して体罰経験の有無や体罰に関する意識の調査を行った(大石・笹生2016)。その結果の概要は、以下のようなものであった。まず、体罰を受けた経験のある者は、全体の10.5%であった。こうした体罰を受けた経験率は、部活動の競技レベルが高い(県・地区レベル大会の経験が5回以上ある)ほど高いという傾向があった。また、部活動の競技レベルが高いほど、体罰に対して肯定的な考えを持ちやすいという傾向もあった。さらに重要な結果は、体罰経験の有無を独立変数に置いた場合の、体罰に対する意

識であった。体罰経験のある学生ほど、体罰に対して寛容な意識を有するようになっていたのである。このことについて、昨年度の報告書では、心理学における認知的不協和理論から説明を行った。

以上のように、昨年度の共同研究では、本学学生の体罰に対する意識が明らかとなった。本年度の共同研究では、一般女子大学の学生にも同様の調査を行うことで、本学学生の体罰に対する意識を相対化することを試みた。

方法

2016年6月～7月に、本学研究倫理審査委員会の許可を得たうえで、一般女子大学学生426名を対象として質問紙調査を行った(有効回答数420、回収率98.6%)。本報告書に関連する質問は、他の質問の一部として実施された。質問内容は、以下の通りである。なお質問項目は、昨年度の本学学生に対する調査と同一である。

調査対象者の競技経験:高校時代の課外活動(運動部活動)における、県・地区レベル大会への出場経験(なし、1～2回、3～4回、5回以上)、全国大会への出場経験(なし、1～2回、3～4回、5回以上)。なお分析に際しては、県・地区レベル大会への出場経験0～4回群と5回以上群に、全国大会への出場経験あり群となし群とに区分した。

課外活動(運動部)における体罰経験:体罰を受けた経験(ない、1回だけあった、たまにあった、ときどきあった、しばしばあった、たくさんあった)。なお分析に際しては、体罰経験のある群とない群とに区分した。

以下、体罰経験のある者のみを回答対象とした。

体罰を行った人の属性:性別(男性、女性)、立場(教員、外部指導員、その他)。

体罰の理由や種類等について:体罰を受けた理由(試合に負けた、言われたことができなかった、ふざけていた、みんなの代表として、理由不明、その他)、体罰の種類(素手での暴力、道具を使つての暴力、罰走や正座などの強要、言葉の暴力、その他)、体罰を受けてその種目が好きになったか(好きになった～嫌いになったの5段階)、体罰を受けてその指導者が好きになったか(好きになった～嫌いになったの5段階)。

体罰への態度:①以下のA～Pの16項目により測定した(非常にそう思う～全くそう思わないの4段階)。A:プレーで失敗したら体罰を受けてもしかたがない、B:選手が弱いから体罰を受ける、C:体罰もない練習では試合に勝てない、D:勝負の世界は厳しいので体罰は必要、E:ある程度の体罰がないと上達しない、F:先生は指導熱心だから体罰をする、G:今では体罰をした先生に感謝している、H:体罰によって自分は精神的に強くなった、I:体罰に耐えて人間的に成長できた、J:体罰に耐えてチームは強くなった、K:体罰があったから必死で練習した、L:体罰に耐えて仲間との絆が強まる、M:体罰から自分だけ逃げるわけにいかない、N:体罰に耐えたのも仲間とのよい思い出、O:周囲からの期待により体罰に耐えられる、P:先生は周囲からの期待で体罰をする。

体罰経験者のみが回答する質問は以上である。以下は、再び全員が回答対象者となっている。

体罰の必要性等:体罰は必要か(絶対に許されない、仕方がない場合もある、必要だ)、自分が指導者になったら体罰を用いるか(絶対に使わない、少しくらいは許される、その時にしないとわからない、使いたくないが使わざるを得ないかもしれない、厳しい指導には必要だ、絶対に必要だ)。

高校の運動部活動で守られるべき生徒の権利:以下の7項目について、あてはまるものをすべて選択した。言葉で傷つけない、先生や先輩に意見が言える、都合が悪ければ練習を休める、性的いやがらせを受けない、下手でも試合を楽しめる、公平に指導を受ける、その他。

結果

(1) 体罰経験

まず、大学別に体罰経験の有無についてクロス表を作成した(表1)。これを見ると、やはり予想通り、本学学生のほうが体罰経験が多いことが分かる($\chi^2=18.702$, $p<.001$)。つまり、本学学生はよりシリアスな部活動を経験してきたために、そうした真剣さが体罰につながるケースが多かったということが推察される。

表1. 体罰体験の有無

	あり	なし	合計
本学学生	39 10.5%	333 89.5%	372 100%
一般女子大学生	8 2.4%	328 97.6%	336 100%
合計	47 6.6%	661 93.4%	708 100%

このことは、昨年度調査における、部活動の競技レベルが高いほど体罰を受けやすいという結果を補強するものであると言えた。実際、本学学生と一般女子大学生のデータを統合したうえで競技レベルと体罰経験の関係を見たところ、表2に見られるように、部活動の競技レベルが高いほど体罰を受けやすいという傾向が見られた($\chi^2=15.553$, $p<.001$)。つまり、

表2. 体罰経験の有無

	あり	なし	合計
県・地区大会 0～4回	9 2.7%	322 97.3%	331 100%
県・地区大会 5回以上	38 10.1%	337 89.9%	375 100%
合計	47 6.7%	659 93.3%	706 100%

体罰経験の有無は、大学ごとの違いというよりも、厳密には高校時代の部活動の競技レベルによるものと言える。

ただしここで注目すべきは、一般女子大学生における無回答の割合である。本学学生は、体罰経験の有無に関する質問に対しての無回答者が2名(サンプル全体の0.5%)であったのに対して、一般女子大学生の場合にはそれが82名(サンプル全体の19.5%)であった。一般的に質問紙調査では、質問の後半において回答者が回答を放棄する場合がしばしば見受けられる。しかし本調査における体罰に関する質問群は、大枠で最後から2番目であり、最後の保健学習に関する質問群に関しては無回答の割合は顕著でなかった。また、非該当と無回答を混同した形跡も見られない。以上のことから、一般女子大学生は、明らかに体罰について回答を拒否する者の割合が高かったと言える。このことは、調査実施時の状況によるものとも考えられるが、口にしにくい内容であるために回答を拒否した者が多かったものと推察される。このように、そもそも体罰について語ることにの抵抗感の有無という点において、本学学生と一般女子大学生に違いが見られた。

こうした非回答者が多かったこともあり、一般女子大学生の体罰経験者はたったの8名(回答者の2.4%)であった。この8名の持つ意識について、統計的に論じることとはできない。また、体罰経験のある本学学生38名と合算しても、昨年度の報告書と大きな違いのある結果は得られないだろう。そこで以下では、こうした数値的限界を踏まえたうえで、本学学生と一般女子大学生との意識の違いについて、差異が見られた項目に限定して論じる。

(2) 体罰に関する意識

本学学生と一般女子大学生との違いとしてまず現れたのは、体罰を受けて、その種目や指導者が好きになったかという質問であった。まず種目について、本学学生は体罰を受けたことでその種目が好きになった者が5名いたのに対して、一般女子大学生では0名であった。また指導者についても同様に、本学学生は体罰を受けた後に指導者が好きになった者が5

名いたのに対して、一般女子大学生では0名であった。このことは、本学学生は体罰を受けたことを肯定的に捉える傾向がわずかながら見られるということである。すでに述べたように、一般女子大学生では体罰を受けた経験のある者の割合がきわめて低かったことから、この傾向に統計的な意味はない。だが、一般的に体罰を受けた後に種目や指導者を好きになることはあまりないと考えられるが、本学学生にはそうでないものも存在したという点で、重要な発見と言える。

次に、体罰経験の有無にかかわらず、体罰に対する意識を問うた質問でも、本学学生と一般女子大学生に大きな差が出た。表3は、体罰についての意識の結果である。これを見ると、絶対に許されないと答えた者の割合は、本学学生が50.8%であったのに対して、一般女子大学生は66.2%であった。また仕方がない場合もあると答えた者は、本学学生が48.4%であるのに対して、一般女子大学生は33.8%であった。また本学学生には、3名のみではあるが、必要だと答える者もいた。これらの差は統計的に意味のあるものであり($\chi^2=18.782$, $p<.001$)、本学学生は総じて体罰について肯定的な意識を有していることが分かる。

表3. 体罰についての意識

	絶対に 許されない	仕方がない 場合もある	必要だ	合計
本学学生	185 50.8%	176 48.4%	3 0.8%	364 100%
一般女子大学生	223 66.2%	114 33.8%	0 0.0%	337 100%
合計	408 58.2%	290 41.4%	3 0.4%	701 100%

なお表4は、本学学生と一般女子大学生を混ぜたうえで、部活動の競技レベルと体罰に対する意識を見たものである。これを見ると、競技レベルの高い部活動に所属していた学生ほど、体罰に対して肯定的な意識を有していることが分かる($\chi^2=12.244$, $p<.005$)。表3の結果と突き合わせて分かることは、本学の学生がことさら体罰に対する肯定的な意識を有しているというよりも、正しくはそもそも競技力の高い

部活動に所属していた者ほど体罰に対して肯定的な意識を有しているということである。このことは表2に関する分析と同様の結果と言える。

表4. 体罰についての意識

	絶対に許されない	仕方がない場合もある	必要だ	合計
県・地区大会 0～4回	209 64.5%	115 35.5%	0 0.0%	324 100%
県・地区大会 5回以上	194 52.4%	173 46.8%	3 0.8%	370 100%
合計	403 58.1%	288 41.5%	3 0.4%	694 100%

(3) 生徒の権利に関する意識

また、昨年度の報告書では体罰と直接関係ないために割愛したが、高校の運動部活動で守られるべき生徒の権利に関する意識について、本学学生と一般女子大学生との比較を行いたい。同項目は、体罰経験の有無にかかわらず全員が回答する項目であるため、サンプル数が十分であり、統計的に意味のある比較が可能となった。

すでに述べたように、本調査では、部活動において守られるべき権利として、「言葉で傷つけない」、「先生や先輩に意見が言える」、「都合が悪ければ練習を休める」、「性的いやがらせを受けない」、「下手でも試合を楽しめる」、「公平に指導を受けられる」、「その他」の7つの選択肢を与えた。その結果、本学学生と一般女子大学生で統計的に有意な差が出たのは、「下手でも試合を楽しめる」と、「公平に指導を受けられる」の2項目であった。

表5は、「下手でも試合を楽しめる」に関する比較である。これを見ると、本学学生は44.9%がそう思うと回答したのに対して、一般女子大学生は31.7%にとどまった。この差は統計的に有意なものであった($\chi^2=14.763$, $p<.001$)。また表6は、「公平に指導を受けられる」に関する比較で、本学学生は73.5%がそう思うと回答したのに対し、一般女子大学生は54.3%がそう思うと回答した。この差もまた、統計的に有意なものであった($\chi^2=31.554$, $p<.001$)。このように、本学の学生は、実力の有無にかかわらず試合を楽しむことと、指導者から平等に指導を受け

られることについて、高い権利意識を有していることが分かった。

表5. 生徒の権利：下手でも試合を楽しめること

	そう思う	そう思わない	合計
本学学生	168 44.9%	206 55.1%	374 100%
一般女子大学生	133 31.7%	287 68.3%	420 100%
合計	301 37.9%	493 62.1%	794 100%

表6. 生徒の権利：公平に指導を受けられること

	そう思う	そう思わない	合計
本学学生	275 73.5%	99 26.5%	374 100%
一般女子大学生	228 54.3%	192 45.7%	420 100%
合計	503 63.4%	291 36.6%	794 100%

まとめ

以上、本研究では、本学学生の体罰に関する意識を相対化するために、一般女子大学生の体罰に関する意識を調査し、比較・検討した。体罰経験のある学生が一般女子大学生には非常に少なかったために、体罰経験者に限った質問項目について統計的に比較することはできなかった。しかし、以上の分析から、いくつかのことが言えた。

まず体罰の実態については、やはり本学学生は一般女子大学生に比べて、体罰を受けた割合が高かった。ただしこのことは、大学間の差異というよりも、高校時代の部活動の競技レベルによる違いと解釈した方が妥当であろう。

次に体罰に関する意識としては、本学学生は一般女子大学生に比べて、体罰に対して肯定的な意識を持つ割合が高かった。このことは、昨年度の報告書からも言えることであるが、体罰を受ける中で、自分自身の競技的向上は体罰のおかげであったと正当化する学生が多いということが分かる。そのことは、表4で見たように、そもそも一般的に競技力の高い部活動に所属していた学生ほど体罰に対して肯定的な意識を有していたことから裏付けられる。とはいえ、

当然ながら本学には競技力の高い学生が多く在籍することから、そうした学生たちに対して体罰に対する正しい認識を教授することは、当然ながらきわめて重要なことと言える。そこで重要なことは、彼女たちの競技的成功はあくまで本人の努力や才能によるものであり、体罰によるものではないということを理解させることが必要となろう。

また、上記の結果と一見矛盾するような結果となったが、本学の学生は一般女子大学生に比べて、高校生の部活動の権利意識が高いという結果も得られた。表5、表6で見たように、本学学生は、部活動において、下手でも試合を楽しめるようにするべきであり、また公平な指導を受けることができるべきだと考えている。このことは、自身が下手で試合を楽しめなかったり、公平な指導を受けられなかったと感じている者が多かったという経験を有していることから得られた意識と言えるかもしれない。ただし、高校時代の部活動の競技レベルと、これらの権利意識についてクロス集計を行ったが、有意な差は出なかった。こうした意識は、所属していた部活動の競技レベルの高低というよりも、本人の体験によるものが大きいと考えることができる。

参考文献

大石千歳・笹生心太(2016) 高等学校運動部での体罰経験の解釈と体罰再生産メカニズムの関連性の検討: 認知的不協和理論による体罰の正当化および集団凝縮性の観点からの体罰のチームワーク強化機能について 東京女子体育大学女子体育研究所所報 第10号 pp. 49-57.